

# 薬史レター

日本薬史学会

J S H P



第 66 号

2013 年 3 月

## 日本薬史学会2013年度の主要行事のご案内

2013年2月20日に開催された常任理事会において、本学会の2013年度主要行事について概略が下記のように決定しましたのでお知らせします。リニューアルなった学会ホームページでもご案内しています。多くの会員の皆様のご参加を期待しております。なお、柴田フォーラム、2013年会につきましては、詳細は続報します。

### ●総会関連

開催日：2013年4月20日(土)受付12:00より

会 場：東京大学薬学系総合研究棟

1) 12:30～13:30 理事・評議員会(10階大会議室)

2) 14:00～15:20 総会(2階講堂)

新名誉会員の推戴式

日本薬史学会賞(奥田 潤先生、高橋 文先生)および日本薬史学会奨励賞

(柳澤波香先生)の授与式 ほか

3) 15:30～17:40 公開講演会(2階講堂)

能崎章輔先生(元化粧品工業連合会広報委員長)「化粧品の歴史—衛生からQOLへ—」

酒井シヅ先生(日本医史学会理事長)「江戸時代の養生訓」

4) 18:00～ 懇親会(東大・山上会館)(4,000円)

### ●第6回柴田フォーラム

開催日：2013年8月3日(土)午後より

会 場：東京大学薬学系総合研究棟(10階大会議室)

講演者：桜井謙介先生(元塩野義製薬研究所主任研究員)「演題未定」

米田該典先生(大阪大学総合学術博物館)「演題未定」

### ●2013年会(札幌市)

開催日：2013年10月5日(土)午前より

会 場：アスティ45(JR札幌駅前・札幌市中央区北4条西5丁目)

懇親会：京王プラザホテル札幌(学会会場から徒歩約5分)

年会長：吉沢逸雄先生(北海道支部長代行・副支部長)

年会実行委員長：関川 彬先生(北海道支部常任幹事)

演題申し込みなど詳細は、決定次第お知らせします。

# 「薬史学雑誌」全巻全号電子アーカイブ化に伴う

## 著作権委譲に関するお願い

2013年2月20日

薬史学雑誌編集委員会

委員長 西川 隆

### 薬史学雑誌著者各位

「薬史学雑誌」(以下「本誌」)は、第1巻第1号が1966(昭和41)年12月25日に創刊され、現在に至るまで日本薬史学会の学術誌として刊行されてきました。

本誌は、薬史学およびこれらと関連する各種分野の研究の発展に大きく貢献し、この分野の日本の代表的雑誌の一つとして高く評価され、1980年よりMedlineにも収載されています。これまで本誌に総説、原報、史伝等(以下「論文等」)を掲載させていただいた多くの著者様、本誌を支えて下さった会員、読者の皆様に深い感謝と敬意を表します。

近時、当編集委員会に対し、本誌を電子アーカイブ化することによって、是非、閲覧および検索を容易にしてほしいとの要望が国内外から数多く寄せられています。

このため日本薬史学会常任理事会および同編集委員会では、本誌がさらに広く世界の学会に貢献できるよう、多くの人々に便宜を図るため、本誌の電子アーカイブ化を実施することといたしました。

本誌の電子アーカイブ化にあたっては、著作権法により、本誌に掲載された論文等の著者から当該論文等の著作権(翻訳権「著作権法27条」および二次著作物利用権「同法28条」を含む。以下同じ)を譲渡していただくことが必要となります。

ただし、1991(平成3)年6月に発行された第26巻第1号以降に掲載しました論文等については、本誌投稿規定(第2項)による著者との合意に基づき、その著作権はすでに日本薬史学会に譲渡されているのはご承知のとおりです。

しかしながら、1990(平成2)年12月に発行しました第25巻第2号以前に掲載した論文等の著作権については、著作権の譲渡の有無が明確ではありませんでした。

そこで、本誌の電子アーカイブ化を実施するにあたり、1966(昭和41)年12月に発行の本誌第1巻第1号から1990(平成2)年12月に発行した第25巻第2号までに掲載しました論文等の著作権を、日本薬史学会に譲渡することを確認させていただきたく、著者の皆様をお願いいたします。

論文等の著作権の譲渡にご了承いただけない場合は、お手数ですが、その旨を2013(平成25)年12月31日までに事務局宛書面または電子メールにてご連絡いただけますようお願いいたします。なお、ご連絡がない場合には、著作権の委譲についてご了承いただいたものとさせていただきますので、あわせてお願い申し上げます。

なお、1991年(平成3)発行の第26巻第1号以後の号につきましては現在、pdf化を進めており、今年度中に学会webに収載予定です。

### 事務局連絡先：

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16  
(財)学会誌刊行センター内  
日本薬史学会事務局

tel : 03-3817-5830

e-mail : yaku-shi@capj.or.jp

## 日本薬史学会2012年会（東京）開催を終えて

年会長 津谷喜一郎

日本薬史学会2012年会開催の可能性の打診は2011年秋にいただいた。わたしは2004年に日本薬史学会創立50周年記念会を東大で準備・開催したことがある。その頃はまだ年会長の概念が明確ではなかったが、学生にも手伝ってもらった時のノウハウを生かせると考え、引き受けることとした。

過去の年会の内容などを調べ始めたところ、前会長の山川浩司先生も同じく調べて表にしてください、またさらに詳しい表を副会長の三澤美和先生が独自に作成された。これらは大変参考になった。「年会」と銘打っての大会は2001年に東京理科大で開催されたものからである。さすがに歴史に関係した学会に役員として長くかかわってきた方はこういう調査が早く綿密である。

全体の構成はシンプルな形ですの方針を立てた。2009年から行われているポスター発表はなしで口頭発表のみとした。会場の近くにポスターを掲示できる十分なスペースがないことと、すべて同じ形式の方がよいと考えたためである。口頭発表の時間は前年の2011年会と同じく15分とした。土曜の年会の翌日、日曜のツアーは、東京は日本の首都でありその必要性は小さいことから行わないこととした。ポスター発表をなくしたことで口頭発表への申し込みが増えることを予想し、特別講演などはなしで構成することとした。ところが、演題の締め切り日になっても口頭発表は予定数に満たなかった。口頭発表だけでは15時頃に年会の全日程が終了することが判明した。

しかし午後の早いうちからアルコールの入った懇親会を行うのは気が引けたため、特別講演と年会長講演を行うこととした。特別講演は以前から関心のあった台湾・中央研究院近代史研究所の雷祥麟先生にお願いすることとした。年会長講演は従来はなかったものだが、私の研究テーマの一つである薬効評価のデザインの歴史について話すこととした。

年会の準備に関しては、これまでも他の会で使っ

ていた、1) 6カ月前からはじまる準備チェックリスト、2) 当日のチェックリスト、3) スタッフマニュアル、を年会用に改訂し用意した。

だが当日、2つの場面で問題が発生した。1つ目は受付が混乱した。年会受付用に用意した机が小さく数も足りなかった。今回は年会の受付と、お昼休みに開催される理事・評議員会の受付を同時に行ったために、事前に用意すべき領収書が複雑になりそれが十分に準備できておらず時間がかかってしまい、年会の開始が約15分遅れた。2つ目は、会のスムーズな進行に必要な鈴を座長席に配置するのを忘れた。

私の研究室は学生数が少なく、今回手伝ってくれた学生の中でそれまでに学会などの経験をしたものがゼロとなっていた。このことが明確に認識されずチェックリストは用意したものの、直前の確認がなされていなかった。また他の研究室の何人かの学生にも手伝ってもらったがコミュニケーションが十分ではなかった。鈴が用意されていなかったため発表時間が延び、午前最後の年会長講演を予定では50分のところを30分に短縮して行った。

海外から特別講演の人を招くことは先に述べたように準備段階の後半で決めた。参加費だけでは会の運営が難しくなることが予想され協賛金を募った。だが2011年11月の日本製薬工業協会の「企業活動と医療機関等の関係の透明性ガイドライン」で手続きに時間がこれまで以上にかかるようになっており、間に合わず、製薬協非加盟の1社のみからの寄付金となった。抄録集掲載の広告料は手続きが容易で、数社から申し出があった。協力いただいた関係各位にお礼申し上げる。

今回、準備にあたり作成したドキュメントは、次回以降の年会関係者へ引きつがれる予定である。

本年会の実行委員長を務めてくれた東京大学大学院薬学系研究科医薬政策学修士1年根岸辰太郎君、他11人の実行委員に謝意を表する。

# 日本薬史学会ホームページリニューアル

広報委員会 委員長 折原 裕

会員の皆様、日本薬史学会のホームページがリニューアルされていることにお気づきでしょうか(<http://yakushi.umin.jp/>)。薬史学会のホームページは昨2012年末に刷新、公開されています。これまで、薬史学会のホームページは五位野常任理事の献身的な努力で維持、更新されてきました。

しかし、情報量が多くなるにつれて個人でカバーできる範囲を超えるようになりました。津谷会長の体制になり、広報を充実させようということになり、広報委員会としてホームページのリニューアルを検討してまいりました。内容は五位野先生の作成されたものを基本として、構造をわかりやすくすることを目指して内容を検討し、制作をホームページ制作会社(株)ドーモに委託しました。テストページは昨年11月に開催された日本薬史学会理事・評議員合同会議においても紹介しました。その後、細かい点を修正しながら昨年末の公開にこぎ着けました。

まず、トップページを見ていただきますと、最近更新した内容が What's New として右側に示されて

おり、それをクリックするとその内容に飛ぶようになっています。また、左側のケシの絵は岩崎灌園「本草図譜」第38巻収載のケシ(罌子粟)数種で、北里大学東洋医学総合研究所の小曾戸洋先生より提供していただきました。

現在、青地の帯の部分には何もありませんが、当初はここに薬史学会のスローガンを入れる予定でした。学会の目指すところを簡潔に示すようなフレーズがありましたらお知らせいただければ幸いです。

リニューアルにあたって、改善した点は以下の通りです。

- 構造を単純化し、目的のページに容易にたどり着けるように努めた。
- イベントのページに支部活動を加えると共に、各支部のページを新設した。
- 薬史学雑誌全論文公開の前に、目次がすべて見られるようにした。
- 薬史レターの過去3年分のPDFを掲載した。今後、それ以前についても掲載予定。

- 入会案内から入会申込書をダウンロードできるようにし、記入後そのままファックスすれば入会手続きができるようにした。

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

日本薬史学会とは イベント案内 出版物 入会案内 関連リンク集

What's New

- 2013.1.29 ISHP Congress Paris (2013.9.10-14)のご案内
- 2012.12.28 日本薬史学会ホームページをリニューアルしました
- 2012.11.17 日本薬史学会東海支部第4回例会研究会(2012.12.11)予告
- 2012.8.27 日本薬史学会学術賞(2012年度)募集のお知らせを掲載しました
- 2012.7.10 柴田フォーラム(2012.8.4)のご案内
- 2012.6.1 日本薬史学会2012年会(2012.11.17 東京)のお知らせを掲載しました。

岩崎灌園「本草図譜」第38巻収載のケシ(罌子粟)数種

日本薬史学会事務局 〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 学会誌刊行センター内  
tel: 03-3817-5821 fax: 03-3817-5830 email: yaku-shi@capj.or.jp

サイトマップ お問い合わせ

updated 2013.1.31

今後、タイムリーなイベント情報の更新、出版物の内容更新に努めていきたいと思っています。また、投稿規定上著作権が学会に委譲されている1991年の第21巻以降は本年中に、またそれ以前のは委譲が完了後、薬史学雑誌の全論文をホームページ上に公開するべく作業を進めています。

## 北海道支部だより

# 日本薬史学会北海道支部活動報告

日本薬史学会北海道支部常任幹事 関川 彬

日本薬史学会北海道支部は、同学会山川前会長から斉藤前支部長に札幌で薬史学会の年会の開催を打診されて、2004年に支部の立ち上げをしました。幹事会、実行委員会の組織を中心とした準備の中から次第に北海道支部の姿が明確になってきました。年会の終了後、支部は会の趣旨と意義を訴えながら会員を増やしつつ、現在は四十数名に至っております。

2009年には支部設立5周年の事業を行い、講演会、記念誌の発行を行いました。5周年という少し短い期間ですが、斉藤前支部長の存命中に事業を行えたことに会員一同安堵の念を共有しております。

支部の活動は、春の北海道薬学大会(札幌)における支部の総会、特別講演、会員の発表および秋の北海道医史学研究会と合同の研究発表会を行っております。

今年度は10月5日(土)に開催される日本薬史学会2013年会(札幌)の準備に向けて、幹事会、準備委員会を毎月開催し、会員の皆様、御伴侶の皆様が秋の北海道を堪能できるように知恵を絞っております。紅葉の季節、会員だけではなくご家族も北海道を楽しむようご準備下さい。

来年は、支部発足、十周年を祝う企画を立てております。

## 関西支部だより

# 第6回 日本薬史学会関西支部研修会報告

日本薬史学会関西支部 研修会世話人 宮崎啓一、多胡彰郎

2012年6月30日(土)16時30分から「くすりの道修町資料館」(大阪市中央区道修町)において、「第6回日本薬史学会関西支部研修会」が開催されました。今回は大幸薬品株式会社社長柴田 仁氏を講師としてお招きし、「木クレオソート(正露丸)の歴史と再発見」と題してご講演をいただきました。

本講演では、1)木クレオソートの変遷、2)正露丸の歴史、3)最新の研究成果、4)将来展望など、「正露丸」メーカー会長ならではの多岐にわたる内容となりました。以下に概略を紹介します。

1)木クレオソートの変遷：日本薬局方では、木クレオソートとは天然のブナ・松・杉等の原木を乾留して得られる西洋生薬とされている。B.C.3000年頃、エジプトにおいて、ミイラの保存に木タールが使用されたと伝えられている。1830年、ドイツの化学者カール・ライヘンバッハが木タールから木クレオソートを精製し、当初熱傷(やけど)、湿疹、

化膿傷や種々の外科治療および歯痛または食肉等の防腐剤として使用された。後に木クレオソートにみられる殺菌効果を期待し、肺結核や消化器系疾患に使用された。アメリカ南北戦争においては消化器系症状の改善に高い評価を得た。

木クレオソートの薬局方収載については、英国、米国およびドイツにおいてはすべて20世紀の間に除外されている。フレミングのペニシリンの発見により殺菌消毒剤として役割を終えたことがその理由となっている。一方、日本薬局方においては後述のとおり、科学的再評価を経て、初版(1886年)以来今日にいたるまでの126年間収載されている。

2)本邦正露丸の歴史：1839年、長崎の和蘭商館長ニーマンにより木クレオソートが日本に上陸したことにはじまるといわれる。この当時森鷗外が肺結核等を研究の対象としたともいわれている。1902年、中島佐一氏は「忠勇征露丸」の『売薬営業免許の

証』を取得し、その後、日露戦争において使用された。1946年、大幸薬品株式会社が「忠勇征露丸」の製造および販売権を継承し、後に「征」を「正」に変更した。

サリドマイド、スモンなどの薬害の発生を端緒とする医薬品再評価制度の創設(1971年)により、クレオソートも再評価の対象となったが、動物実験および臨床試験を実施した結果、一般用医薬品としての安全性と有用性が認められ、木クレオソートは日本薬局方収載品として評価されるに至っている。

**3) 最近の研究成果：**1991年、基礎研究の更なる充実を目的として、P3レベルおよびRI実験設備を備えた研究棟を建設。木クレオソートに関する発がん性試験をはじめ、分泌性下痢およびストレス性下痢に対する効果、ならびに蠕動運動正常化作用等について検討を加え、これらのメカニズムなども明らかにした。また、発がん性に関して問題となった木クレオソート(日局)については、実際には石炭クレオソート(JIS規格)に認められるものであることを実証し、海外の誤情報を訂正した。

**4) 将来展望：**木クレオソートに関する誤解の払拭努力と再評価への対応から、(1)安全性と有効性の検証、(2)作用メカニズムの解明、(3)研究開発力の獲得等の重要性を再認識するとともに、(4)伝統薬の存続と発展、(5)新製品の開発、(6)拡大するアジア市場への進出および木クレオソートの欧米への里帰りというグローバル展開への抱負についても語っていただきました。

本研修会については薬事日報社よる取材を受け、その内容が薬事日報(2012年7月18日、8面)に紹介されました。また折しも、研修会直後に発行されたファルマシア誌上にも日局木クレオソートの記事が掲載されました(米持悦生、“談話室 日局木クレオソート”、ファルマシア、48(7)、629(2012))。これらもご一読いただきますように。

本研修会には初参加、会員および非会員をあわせ、24名の参加があり、第1回の開催より最高の参加者数となりました(懇親会参加者計20名)。

研修会終了後、場所を交流会場に移して引き続き、正露丸をめぐる活発な意見交換や道修町談義がなされました。最後に柴田会長のご健康、また大幸薬品株式会社のますますのご隆盛を祈念して、第6回日本薬史学会関西支部研修会および交流会は盛会裏に閉会いたしました。



交流会場にて

## 北海道薬学大会・薬史部会で本会会員が発表

2013年5月開催の北海道薬学大会で日本薬史学会会員の小松健一先生(北海道薬科大学)他が「後志の薬史 人物編：アスパラガスの父 下田喜久三」を発表する。下田は、寒冷地向農作物の研究に献身、寒冷対策としてアスパラガスの新品種育成に努め成功し、北海道農業に大きな功績を残した薬剤師。1895(明治28)年北海道岩内町に生まれ、1910(明治43)年私立東京薬学校(現・東京薬科大学)を卒業、

岩内に帰ったが、1913(大正2)年北海道を襲った冷害の惨状を目の当たりにした下田は、薬舗から離れ、寒地に安定な作物の試作を始め、寒さに強いアスパラガスの新品種を得た。1924(大正13)年日本アスパラガス株式会社を岩内に創立、本道アスパラガス栽培の嚆矢となる。北海道大学から農学博士を受ける。薬学大会では岩内アスパラガスの成功物語とその苦難の経緯などを報告する。1970年他界。

## 五史学会 (2012)参加記

常任理事 五位野政彦

冬の晴天は、夏以上にその青さが身体につきささる。日差しは暖かかったが、強めの風に寒さが身にしみる2012年12月8日(土)、例年恒例の五史学会講演会が行われた。

今回会場となったのは、順天堂大学医学部11号館16階の北フロアである。例年お世話を戴いている酒井シヅ順天堂大学特任教授(本学会評議員)の研究室が、この11号館に移ったので、このフロアが会場となった。本学会の小清水敏昌評議員(前順天堂大学浦安病院薬剤科長)によると、この建物は英国人が設計したもので、以前は放送局が使用していたとのことである。そう言われれば、オープンなフロアとその周りの吹き抜け構造は「ニュース番組の背景」を思わせる雰囲気がある。昨年までの「学生と同じ気分の教室」とは違った、まさに討論の場というべきフロアに医療関係五史分野の研究者約100名が集った。参加費は例年通り200円である。

定刻の14:00に岡田靖雄先生(医史学会理事)の司会で開始。五史学会それぞれから発表された5演題の内容はほぼ次の通りだが、聴講した5つの発表とも各学会のエリートともいべき内容であり、各40分という時間がとても短く感じられた。

### 1. 西川 隆(日本薬史学会):「MRの歴史 日本最初のプロパー誕生から百年」

1912年に、MRの前身であるわが国最初の近代的プロパーが誕生して100年を迎えた。演者は、プロパー誕生初期の歴史を中心に、その誕生の社会的背景と黎明期のプロパー6人(ドイツ人を含む)の業績、経歴を報告した。

日本人最初の近代的プロパーは、薬剤師二宮昌平であるとした。ロシュ社は1911年に日本での自社製品普及のため、ドイツ人外科医のエベリング(東洋部次長)を日本に派遣した。彼は東京・築地に同社日本学術部を設置、エベリングが求めるドイツ語に堪能で医学知識を必要とするプロパーとして推薦された当時巢鴨病院薬局長の二宮昌平を最適な人材



として雇用した。翌1912年1月から二宮はエベリングに同行し、主要都市の大学、医師会の主要メンバーに欧州式近代的な普及活動を開始した。エベリングのドイツ語での説明を二宮が通訳する形の講演会が開催され、製品展示、サンプルや文献の提供も行われるなど、それまでのわが国にないやり方であった。その際「宣伝は相手が医師だからセールス行為に出ない」という方針をとった。

黎明期のプロパーとしてほかに、柳澤保太郎(武田薬品初代新薬部長、グレラン製薬創設者)、児玉秀衛(塩野義製薬取締役、初代新薬部長)、市野瀬潜(京都新薬堂を興し、日本新薬創立者)、林 四郎(鳥居商店初代新薬部長)を紹介した。

結びとして「情報の提供を通じて自社品の普及(販売)を図るというプロパーの目的は、名称がMRと変わっても不変で、両者のバランスがいつの時代でも大切である」と述べた。

フロアからは、当時の欧州における医薬品宣伝方法などについて質問があった。また五位野が2012年8月のMR100周年記念シンポジウム(日本病院薬剤師会関東ブロック第42回大会:横浜)での製薬団体連合会の発言「売上とは関係ないMRの評価方法の模索」について発言した。

### 2. 杉浦勝明(日本獣医史学会):「口蹄疫の歴史 その流行と防疫の変遷、現在の課題」

2010年に宮崎県で起こった口蹄疫とその食品、

経済への影響は記憶に新しい。発表はアリストテレス時代にある「牛の足の病気」という記載を嚆矢とし、16世紀に発生したペローナでの口蹄疫の特徴的症狀の記載から、今世紀初頭の英国、オランダの集団発生までの詳しい報告であった。同時に口蹄疫そのものの解説、防疫対策とその課題についても通常は容易に知りえない情報が多々あった。

### 3. 樋口輝雄（日本歯科医史学会）：「伊澤信平と歯科医術 ハーバード大学に留学した蘭軒の孫」

伊澤蘭軒は、森鷗外の同名の史伝でも知られている江戸末期の医師である。本題はその孫、伊澤信平についての報告である。伊澤は、明治初期に現在の東京大学医学部の予科に進学後、ハーバード大学歯学部を卒業。ドイツでコッホに学んだ後、明治中期から大正にかけてわが国歯科医学界で指導的役割を果たした。発表では1891年（明治24）9月同大学卒業に関する掲載記事など多くの史料から業績を報告があった。

### 4. 川原由佳里（日本看護歴史学会）：「第二次世界大戦におけるビルマの兵站病院と日本赤十字社救護班」

演者は、日本赤十字看護大学で学生に講義するには「戦争と赤十字社」の関係を考えないわけにはいかないという。本演題は、ジュネーブ条約における赤十字社（赤新月社）の役割とは裏腹に、戦時体制に組み込まれていく日本赤十字社と、ビルマ戦線における看護婦の悲劇的な活動の数々を防衛省の公開資料を丹念に調査して報告したものである。インパール作戦の無謀さは知られていても、その戦地での看護婦の献身的な活動は知られておらず、その内容は真に迫りくるものがあった。多くの機会を報告してほしい研究である。

### 5. 鈴木則子（日本医史学会）：「江戸時代の労瘵（ろうさい）～病にみるジェンダー～」

文学資料にみられる恋の病や思春期の上流社会の女性など情緒的な病気のイメージは、どこからきたものであるのか。本研究は、その点を当時の中国医学書と元禄時代のわが国医学書にみられる内容を報告

したものである。例えば「気うつ」という概念は、元禄時代に生まれ、社会的に認知されたのも同時期であるという点は、「社会が病名をつくる」という現代でも通じる現象であるなど示唆に富む報告であった。

司会を務めた岡田医史学会理事から「各発表ともレベルの高い内容であった。質疑も活発に行われ、よい合同例会だった」との総括が行われ閉会した。その後18:00から会場を順天堂医院1号館2階レストラン・ヒルトップに移し、懇親会（会費6000円）が賑やかに行われた。

本会からは津谷会長が挨拶し、「わが学会切り札の西川氏がMRの話をした。薬学の歴史は産業と関係が深い、という点で他の医療の歴史研究とは違う側面をもっている。大手製薬企業の社史は錚々たる経済学者も関わって作成しているものもある」と述べた。また看護歴史学会の発表にからみロジスティックの面からの当時の軍体制にも言及した。

酌めども尽きぬビールやワイン、料理を楽しみながら19:20に散会となった。

**【閑話休題】** 通称「五史学会」と呼んでいる。正しくは「日本医史学会・日本薬史学会・日本獣医史学会・日本歯科医史学会・日本看護歴史学会 合同12月例会」である。1993年に医史学会と薬史学会の合同例会として始まり、獣医史学会、歯科医史学会、看護歴史学会の順で加わった。

次回2013年12月の五史学会は薬史学会が幹事学会となる予定。ちょうど合同学会開始から20周年の節目の年に当たるので、「20周年記念会」として非会員の医療関係者にも参加を呼びかけ、オープンな講演会にできないでかと夢が膨らむ。



## 薬学における薬史学領域やドライ系領域での博士論文リスト作り

東京大学大学院薬学系研究科医薬政策学 津谷喜一郎

東京大学薬学図書館4階のわたしの研究室の隣の稠密書庫に、戦後、大学が新制となった後の博士論文が製本化されて電動書架に配置されている。一番厚く目立つのが石坂哲夫氏の「薬学の歴史試論」で上下2冊で約1,000頁だ。

わたしの講座は2001年から医薬経済学、2006年からは医薬政策学として日本ではまだ数少ない非実験系のドライラボである。そこで、ドライ系の薬学の歴史と現状そのものを研究テーマの一つとし、その一環として東大薬学でドライ系の領域での博士論文のリストをつくりwebで公開している。2013年1月末時点で課程博士が6人、論文博士が16人だ (<http://www.f.u-tokyo.ac.jp/~utdpm/drylab.html>)。そのうち薬史学関係は4人、すべて論文博士で、学位授与順に並べると以下となる。

- 1) 根本曾代子. 東京大学薬学部前史. 1980.
- 2) 石坂哲夫. 薬学の歴史試論. 1980.
- 3) 山田光男. 日本薬局方における医薬品鑑別試験法の変遷. 1985.
- 4) 天野 宏. 江戸、明治期に形成されたわが国特有の薬文化、その史的考察. 1991.

日本全体ではどうなっているだろうか？ 国立国会図書館に博士論文検索のシステムがある (<https://ndlopac.ndl.go.jp/>)。これを使い「詳細検索」で「キーワード」として、「薬史」と「薬学史」で調べるとタイトルにこれらの用語が入った5つの論文が見つかる。博士号を授与した大学名とともに記す。

- 1) 清水藤太郎. 日本薬学史. 東京大学. 1951.
- 2) 宮下三郎. 漢薬・秋石の薬史学的研究. 京都大学. 1969.
- 3) 播磨章一. 漢薬・大黃の薬史学的考証と品質評価に関する研究. 近畿大学. 1994.
- 4) 杉山 茂. 中・近世における外郎(ういろう)家と売薬・透頂香(とうちんこう)の展開に関する薬史学的研究. 千葉大学. 1997.
- 5) 福田浩三. 大和当帰の栽培調製法の薬史学的考

証および日本と中国で生産した大和当帰の評価. 近畿大学. 2010.

上記以外にも、タイトル中に薬史や薬学史という用語を含まない薬史学領域の博士論文、薬学以外の領域での薬史学領域の論文、なども存在しよう。

大学別のもとしては、先の「詳細検索」の「注記」で大学名や薬学などといれることにより、薬学部や薬科大学別のリストが作成できる。タイトルを読んでスクリーニングすることになる。場合によっては抄録や本文を読む必要も出てよう。

国立情報学研究所の「博士論文書誌データベース」は、先の国会図書館のデータベースをベースにさらに使いやすくしたもののようなものである。 [http://dbr.nii.ac.jp/infolib/meta\\_pub/G0000016GAKUII](http://dbr.nii.ac.jp/infolib/meta_pub/G0000016GAKUII)

大学によっては学部別の博士論文リストをもつところもあり、また薬学部同窓会の『XX年記念誌』などに載ることもあるようだ。

上記の website には、その後、名城大学、慶應義塾大学、明治薬科大学、京都大学、北里大学については研究協力者を得て、リストを追加させていただいた。

薬学の世界では、昨2012年4月から、6年制の学部卒業生が入学する4年制の博士コースの大学院がスタートした。また薬学部を卒業し就職後、ドライ系で修士や論文博士を得たいと希望する人も増えているようだ。

日本の薬学において、どのような博士論文が、広義のドライ系の領域に存在するのかの日本全体のリストづくりは、今後の大学院教育や博士論文の内容や質に関する議論にも役だとう。

ドライ系の薬学は何かと議論しはじめると種々の考えがでてきてまとまらなくなることがある。しばらくは、特に定義せず、広義のドライ系として博士論文のリストを作成し、ある程度の数が集まったところでグルーピングなどをするのが実際的と思われる。

会員諸氏で、母校などのドライ系の博士論文に関心あり、研究に協力いただける方はご一報いただきたい。

## 「MR100年史」

発行：公益財団法人 MR認定センター 製作：(株)薬事日報社 2012年12月刊

わが国の医療用医薬品の販売額は、総額10兆円に届こうとしている。医薬品は、適格な対象患者に適正な用法・用量で使用されないと期待される効果が発揮されず、逆に副作用が発現する恐れがある。その適正使用情報の収集、伝達という業務を担当するのはMR (Medical Representative・医薬情報担当者)である。資格認定をパスした現役MRは6万人を超し、大きな専門家集団となっている。その起原を辿ると、1世紀前の明治末期に遡るといふ。

MR誕生100周年を記念して公益財団法人MR認定センターが作成したのが、ここに紹介する「MR100年史」である。本書は、MRの通史としてわが国初の著作であるだけに、かなりの労作である。編纂委員長は本学会常任理事の西川 隆氏が務め、委員には本学会評議員の竹原 潤氏と小清水敏昌氏が、さらに協力者として本学会理事の平林敏彦氏が加わり、それぞれが分担執筆している。



この本は3部構成になっている。第1部は100年間のMRの活動を中心に製薬業界の変遷を辿った通史、第2部はMR経験者の体験談と女性MRの座談会、第3部はMR教育センター設立期の資料である。もう少し詳しく内容をみてみよう。

第1部の序章では、明治45年(1912)、ロシュ社日本学術部のエベリング医師の指導を受けて近代的

な学術宣伝を開始した二宮昌平をわが国MR第1号と判定している。さらに大正時代にかけて他社の代表的な営業マンを含めた活動状況を紹介し、プロパー黎明期としている。第1章では、大正3年(1914)に歿した第1次世界大戦を契機とした医薬品の国産化に伴う製薬会社の活動状況を昭和の戦前期までを記述。第2章は、戦後の復興期と欧米の新薬導入時代のプロパーの情報提供の混乱期を、第3章は、昭和30年～40年の国民皆保険と高度成長による医薬品市場の急速拡大に伴う添付販売とその規制に係る行政や製薬企業の動向を、第4章では、昭和50年代から平成にかけての年代をプロパーからMRへの資質向上時代を、第5章では、平成10年ころのMR業務の変革をもたらした医療用医薬品製造業公正取引協議会(公取協)の動きとその要因となった汚職事件や業界の再編を、第6章では、MRの資格化と教育研修センターの設立までの動向について、それぞれ詳細に説明されている。

第2部の前半では、昭和30年代の製薬業界の拡大期に活躍されていたMR経験者11氏(11社)の回顧録で、当時の各社のMR活動が具体的に記載されている。後半は、戦後の女性MR第1号の野田尚子氏(元塩野義製薬、1958年京都大学医学部薬学科卒業)と現役女性MR3氏による座談会で、女性の視点からのMR活動の課題などが語られている。

第3部では、MRのあり方に関する検討会、MR資格制度検討会報告書など当局資料やMR認定試験の結果、専攻分野別MR数などの現状を示す資料に加え、MR年表が掲載されMR関連の歴史的な動向が理解しやすくなっている。

本書の特に第1部を通読すると、MRの歴史ばかりではなく、清濁合わせた製薬業界の100年を俯瞰できる、いわば製薬産業史ともなっている。日本薬史学会と関係の深い書籍として学会の皆様にご一読をお奨めしたい。(荒木二夫)

## 薬史かわら版

### 薬剤師検索システム(厚生労働省)

インターネット上、自分が薬剤師であることを知ることが出来る方法が、身近にあることをご存知でしょうか。

厚生労働省のホームページに「薬剤師資格確認検索システム」があります。これは平成20年から運用されているものですが、ここに名前を入力すると、その名前の薬剤師が存在する場合「名前」「性別」「登録年」および「行政処分に関する情報」が表示されます。医師・歯科医師についても同様の検索システムが2007年から使われています。

もちろん、これは「ニセ薬剤師」や「ダメ薬剤師」についての情報の一助となるものですが、すこし興味深い情報も出てきます。下記は同検索システムで検索した結果(2012年12

月25日現在)です。名前(登録年)の順で書きました。

木村雄四郎(大正10年)、石館守三(大正15年)、根本曾代子(昭和5年)、高橋真太郎(昭和6年)、野上 寿(昭和16年)、宗田 一(昭和16年)、宮木高明(昭和17年)などわが薬史学会に大きな足跡を残された方々の名前が、今なお薬剤師名簿に掲載されているのに、驚きました。

薬剤師法施行令第六条などを持ち出すのは無粋ですが、こうして数多くの偉大な先人たちがまだ名簿上、われわれを見守っていると考えると、同じ名簿に自分の名前が存在することに誇りを感じます。

(五位野政彦)

### 都薬雑誌に本学会会員が「くすり博物館」連載開始

都薬雑誌(東京都薬剤師会発行)に、2013年1月から日本薬史学会会員の平井 有(ひらい たもつ)氏による売薬の歴史についての連載が始まりました。ここで簡単にその内容を紹介します。

タイトルは「くすり博物館 今は昔 売薬歴史シリーズ」です。歴史の長い家庭薬を毎月1点ずつ紹介していくものですが、1月号は「命の母」、2月号は「エビオス」、3月号「中将湯」が取り上げられています。アンティークともいってよい平井氏のコレクションからその家庭薬に関わる品々がふんだんに紹介されています。もちろん、その家庭薬に関する効能

や歴史についても様々な多くの情報を読むことが出来ます。

平井氏は2008年10月16日付の日本経済新聞文化面で「昔の薬品コレクション」を紹介したことやテレビ番組「開運なんでも探偵団」の出演(2006年11月)などがあります。また現在でも立川市薬剤師会広報誌に「くすりコレクション紹介シリーズ」として、家庭薬を中心にした薬学史関連のコレクションについてコラムを毎号連載している健筆家です。

都薬雑誌はおそらく多くの薬学部図書館で読むことができるはずです。ぜひ毎号お読みいただくことをお勧めします。

(五位野政彦)

## 震災で壊れた倉のガラクタ 薬局待合室のミニ展示コーナー

評議員 奥井登美子 (奥井薬局)

古い街の中の薬局は、それぞれに小さな歴史があると思う。

今、個人薬局がどんどん消えていく。25年前、志高く創った土浦地域の「調剤研究会」の仲間たちも、廃業したり、グループ薬局に吸収されてしまったり、淋しい限りである。

何年か前、日本薬史学会の研修で行ったドイツの街。どこの街も、小さいながら個性のある薬局があり、机1つのスペースに、その薬局の昔の写真や器具などを並べて、歴史をしのばせるコーナーがあった。ヨーロッパでは、薬局が昔の器具や歴史を大事にしている。

一昨年の震災で、我が家の明治元年の倉も壊れてしまった。片付けていたら、「明治28年購入」「捨てないでください」と書いた器具と、手作りの凸凹のガラス瓶がたくさん出てきた。泥だらけの見るからに汚らしい器具と瓶である。

明治28年といえば奥井薬局創業の年。祖父の平沢有一郎は明治26年茨城県ではじめての公認の薬剤師。奥井家にきて、薬局を開いた。

昔の水戸街道沿いの、土浦の商店街は、「蔵の街」として蔵を観光の売りものにしてきたが、

震度6の震災で多くの土蔵が無惨に壊れ、町の中にはわか作りの駐車場だらけになってしまった。我が家の110年前のガラクタを「町起こしに」使ってみるのも、個性的な面白い町起こしが出来るのではないかと考えて、街づくりコンサルタントの友達に相談してみた。彼は博物館の学芸員、商業デザイナーなども仲間に入れて相談し、震災のガラクタを、薬局の待合室の隅にミニミニ展示コーナーとして、展示してくれた。一番目立つところに100本以上の凸凹の薬瓶。小僧さんが薬を配達したつぎはぎだらけの風呂敷と半纏。目立たないところに、新渡戸稲造氏が我が家に来た時の、氏に抱かれた6歳の奥井誠一(元東北大学薬学部教授)の写真。

凸凹の薬瓶の余波はまだある。誠一兄の遺品、大野貢氏のクラインボトルが展示品として新たに加わった。ガラス職人としてカンザス大学にいて世界的な話題を撒いた大野氏は、東大にいた時、柳田友道氏や兄や姉とも親しくしていたという。しかし、この不思議な形のトポロジー理論のガラス瓶を、安全な形でどこに展示しようか、今、頭を悩ませている。

### 薬史レターへの投稿をお待ちしています

薬史に関するエピソードをはじめニュースや図書紹介などなど、会員からの投稿をお待ちしています。送り先は日本薬史学会事務局宛にお願いします。図書紹介は表紙をスキャンなどしてお送り戴ければ有難いです。次号(第67号)は2013年6月発行予定(締め切りは4月末日)です。

### 日本薬史学会編集委員会

編集委員長：西川 隆

編集委員：荒木 二夫 小清水敏昌 砂金 信義 ヨング・ジュリア

## 薬史レター 第66号 2013年3月

編集人：西川 隆 発行人：津谷喜一郎

日本薬史学会 The Japanese Society for History of Pharmacy (JSHP)

〒113-0032 東京都文京区弥生2-4-16 (助学会誌刊行センター内) 日本薬史学会事務局

tel : 03-3817-5821 fax : 03-3817-5830 e-mail : yaku-shi@capj.or.jp <http://yakushi.umin.jp>